福島っ子ウィンターキャンプ

子どもの咲顔（えがお）、家族の希望

～未来へ感動（can do）～

期間：2011 年 12 月 26 日～31 日

aichikara

もくじ

福島っ子ウィンターキャンプ

はじめに ……P.1

僕たち私たちの生活　～6 日間の歩み～

肌で感じた自然

見上げた空の先に

外で遊べるよろこび

おかわり！

涙の色

むすびに ……P.8

保護者から

協力者から

社会人サポーターから

あなたの“生きる”は何ですか？

子どもたちの作文 ……P.14

あなたは小学生の頃、

“感動”して泣いたことがありますか？

はじめに

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ
ウィンターキャンプ子ども隊長　野田実里
名古屋市立大学 1 年

昨年の夏、福島のみなさんにとって“愛チカラ”という団体は決して信頼でき、安心できる存在ではなかったと思います。23 日間を共に生きた私たちと子どもたちの間には、目には見えないけれど、きっと一生切れる事のない繋がりを感じました。

そして“福島っ子ウィンターキャンプ”の開催は当然のことであったと思います。

今もなお福島県伊達市に暮らす子どもたちにとって、思いっきり外で遊べる環境があること、家族や友達にも吐き出せない心の中を、打ち明けられる存在がいることは、子どもたちが笑顔になる為にどれほど重要なことなのか何度も心に突き刺さりました。

今回のウィンターキャンプでも『ただ思いっきり遊んで、心の底から笑いたい。』という子どもたちの素直な“思い”を再び感じました。そして、その奥にある深い“思い”の存在に気付かされました。外で遊べないことが当たり前になり、友達との別れを余儀なくされた子どもたちは、いきなり突きつけられた現実を受け入れる他に、道は無かったのだと思います。
今やもう彼らにとっては、大きすぎて抱えきれなくなってきているという事がひしひしと伝わってきました。

このキャンプを通して私たちはこんなにも純粋で、素直な子どもたちと出会い、一緒に生活できたことを誇りに思います。

この報告書の中には、私たちから子どもたちへの感謝の気持ちと、愛情がいっぱい詰まっています。私たちが共に生きている証を、イマここに記します。

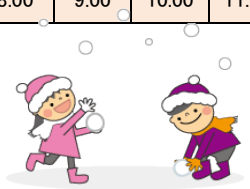
僕たち私たちの生活　～６日間の歩み～

26日　《セレモニー》

6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
		福島出発										到着	セレモニー	夕食	入浴	就寝

27日　《スキー》

6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
起床	朝食					スキー						夕食	入浴		日記	就寝



28日　《勉強、たこやきパーティー、自由時間、サンタ襲来》

6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
起床	ラジオ体操	朝食	勉強		たこやきパーティー		自由時間					入浴	夕食	日記	就寝	サンタ襲来

29日　《スケート》

6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
起床	朝食					スケート						夕食	入浴	日記	就寝	

30日　《勉強、餅つき、大掃除、フィナーレ》

6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
起床	ラジオ体操	朝食	勉強		餅つき				大掃除		駄菓子屋	フィナーレ			入浴	就寝

31日　《出発》

6:00	7:00	8:00	9:00	10:00	11:00	12:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00	18:00	19:00	20:00	21:00	22:00
起床	出発準備	朝食	出発											福島到着		

肌で感じた自然

2011 年 3 月 11 日。

あの日までは、庭や畑に積もった雪が子どもたちにとっては“遊び道具”でした。それが、今は触れる事すら許されない…。

あの日を境に自然と触れることができなくなってしまった子どもたちは、雪で遊ぶという本来の楽しみを見失いかけているようでした。

子どもたちはゲレンデに積もった雪を両手に握り、友達と雪をかけ合い、雪の上に寝転び、雪の感触を肌で確かめ合っていました。

そんな中、ある子が「この雪触って大丈夫なの？」と言いました。

一緒に参加したお母さんは、「ここの雪は食べていいんだよ！来年はシロップ持ってきて食べたいね！」と子どもに言葉を返しました。

その子は、薄れていた記憶を思い出したかのように、友達が待つ雪の中へ全力で駆け出して行きました。

初めは滑ることを怖がっていた子どもたち。転んでは立ち上がりを繰り返しながらも、前へ前へとがむしゃらに挑戦する姿は、本来の子どもの姿でした。

思いっきり遊んだ子どもたちは、クタクタになり帰りのバスではほとんどの子どもが眠っていました。

その寝顔からは、どこか達成感に満ちているようでした。

見上げた空の先に

東北で育った子どもたちですが、スキーもスケートもほとんどの子が初めての体験でした。野外のスケート場からは山が見え、空気はひんやりとし、子どもたちのワクワクとした気持ちが一層高まっていきました。

初めは氷の上に立つことがやっとだった子どもたちですが、友達と手をつなぎ、一歩一歩前へ滑り出しました。

遊びを通して“一緒に頑張る”という事が子どもにとって大きな励みになるのは、当たり前の事です。新しいことにチャレンジする機会が奪われている事は子どもたちの成長にどれだけの影響があるのでしょうか…。

リンクの別の所では、ある女の子がわざと転び、氷の上にふと寝転がりました。「気持ちいい？」と聞くと、空を見上げ、とても穏やかな顔で「気持ちいいー！」と言いました。

制限のない場所で、思うままに感じたままに遊べず、ゆっくりと空を見上げる事ができなくなっている現実を、言葉では表現しきれないメッセージで、この子は私たちに伝えてくれました。

外で遊べるよろこび

今回のキャンプの「自由時間」というプログラムは、普段の生活の中で、思いっきり何かをするということから遠ざかってしまった子どもたちに、ただ当たり前の事を当たり前のように過ごしてもらおうと企画されたものでした。

ここでは、時間や環境に縛られず“遊ぶ”ということを何よりも大切にしました。

目の前に積もっていた雪を片手に、友達やお目当てのスタッフにめがけて雪を投げつけ大笑いし、ある子はスタッフとボールを使って遊び、バドミントンをして過ごしました。

室内では楽器演奏など、自分が得意とする所に居場所をつくり、それぞれの遊びをスタッフと一緒に楽しんでいました。

3 月 11 日の震災が起きるまで、普通に出来ていたことが出来なくなったことへの子どもたちなりの“不満”と“我慢”…。それら今まで溜めていたものをぶつけ、発散しているようにも見えました。

ただ自由に、思うがままに遊ぶことは、子どもたちの“心の健康”そのものです。

おかわり！

　農協発祥の地で生まれ育った子どもたちは、採れたての新鮮な野菜やお米を食べることが出来なくなってしまいました。「この食べ物は安全なのだろうか。」「自分の体に害はないのだろうか。」と常に不安を抱えた環境で暮らすようになりました。
　本来であれば、育ち盛りである子どもたちにとって食べ物は“元気の源”であり、野菜やお米が安全か危険かを考えずにたくさん食べ、子どもたちはたくましく育っていくものです。
　キャンプ初日から最終日までスタッフの作る食事に対して「おかわり！」の声が食堂をにぎやかにし、誰もが驚くほどに残飯がありませんでした。

　どこで採れたか分かっている野菜やお米を、不安から開放された所で食事ができた事で、子どもたちの身体だけでなく、心にも“栄養”が行き渡りました。

涙の色

子どもたちは最後の夜、大きな声を出しながら大粒の涙を流しました。

子どもたちの涙に色があり、それが見えるとしたら、心の声にもっと寄り添う事ができるのかもしれません。
初めてキャンプに参加した子も2度目の参加の子も、お互いの経験を越え、ひとつの心の声が涙に変わり溢れ出しました。

みなさんは子どもの頃、感動して泣いたことはありますか？

五感を研ぎ澄まし、心を震わせ、ことばにならない“思い”を大粒の涙にかえて泣いたことはありますか？

“感動”して涙する。

人の痛みがわかる、人の努力がわかる、人の優しさがわかる。
子どもたちの心は、確かに成長しています。

2011年3月11日に起きたあの出来事は、イマを生きる私たちに何を伝えようとしているのでしょうか。
子どもたちの涙と心を通して私たちの心に問いかけるメッセージ… 。

この旅は、
まだ終わらない。

むすびに

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ
ウィンターキャンプ隊長　横倉亜美
至学館大学 1 年

このキャンプの中で、子どもたちは 10 年後の自分に宛てて手紙を書きました。私たちが 10 年前考えもしなかった事を、子どもたちは考えていました。夜眠れなくて泣き出してしまう子、体調が悪い訳ではないが保健室に行く子など、子どもたちの声にならないメッセージが伝わってきました。

私は、、みんながイキイキしていることが子どもたちの笑顔に繋がると感じ、環境を整えることに力を注ぎました。

最終日、子どもたちは大粒の涙を流しました。しかし、キャンプが始まる前はその姿を想像することができませんでした。私は日頃子どもたちが、いかに苦しい状況で生活してきたのかを考えさせられました。

目に見えない放射能はストレスとなり、子どもたちの心からの笑顔や希望を奪っていきました。私たちが子どもたちの幸せのために出来ることは、一緒に楽しく笑いあうことだと強く感じています。

だからこそ、これからも明るい未来のために支援は必要となります。

愛チカラに協力してくださり、本当にありがとうございました。
みなさんの支えがあり、無事ウィンターキャンプを終えることができました。一人の思いではできないことが、みんなの心が響きあう事によって、何でもできる事を実感しました。

まだまだ未熟な私たちですが、これからも福島の子どもたちのためにご支援ご指導の程、宜しくお願い致します。

保護者から

小国からの咲顔（えがお）

代表　大波尚美

2011 年 3 月 11 日　あの震災は起こった。

地震の被害はあまりなく、ほっとしたのもつかの間、原発の爆発があり、そこから福島は変わってしまいました。

その中で、子どもだけでも守りたいという強い気持ちで、3 週間という長いサマーキャンプに、わらにもすがる思いで行かせた時の事を今でも鮮明に覚えています。

子どもたちも親と離れて知らない土地へ行くという決心はなかなかつかないままでの出発だったと思います。

3 週間という長い日々、過ぎてみれば、スタッフと別れるのが辛くなるほどの絆が出来ていたのには、正直驚きました。サマーキャンプの数日、私たちも参加させていただいて、それがよくわかりました。スタッフは、ほとんどが学生さんなのに子どもたちと正面から向き合い、ただ遊ぶだけでなく、泣いたり、笑ったり、語ったり…。

事故のことで不安になり、イライラしている親の私たち以上と思う程の愛情で子どもたちと生活してくれていたのでした。親も子どもも忘れていた気持ちや時間を思い出させてくれた大切なキャンプでした。

その後も、福島まで子どもたちに会いに来てくれたり、手紙や電話で、その距離はどんどん近くなりました。

放射能の問題は、ほとんど変わらないまま時が過ぎ、ウィンターキャンプの季節になりました。出来る限りの協力をしたいというより、一緒につくりあげたいという気持ちで私も参加させていただきました。ウィンターキャンプでは、サマーキャンプとはまた違った手作りのあたたかさを感じるキャンプでした。子どもたちもサマーキャンプ程の緊張もなく、本当の家族に久々に会ったように沢山甘えていました。

その表情は皆、心から輝く素敵な咲顔でした。

保護者の思いは、もちろん避難という意味もありますが、夏の時のような不安からの避難というより、楽しい休日を過ごしてほしいという願いに変わりつつあるような気がします。

サマーキャンプから今までを私なりに振り返ると、保護者の考えもそれぞれ変わりつつあり、これからのあり方を考えていく転機であるような気がしています。子どもたちの気持ちを尊重しつつも、現状と向き合いながらよりよいこれからを一緒につくりあげていけたらと思っています。そして、愛チカラの皆さんは、小さな力が集まって、とても大きな愛となって子どもたちの生きるチカラになっていますので、これからもその変わらない大きな愛で子どもたちと一緒に成長していって下さい。

本当にありがとう！！出会えたことに感動（can do）！！です。

協力者から

株式会社 中島工務店
代表取締役 中島紀于

去年の秋から何回も加子母へ足を運んで来る愛チカラの人達の熱心さに驚いていました。いよいよ暮れの 26 日の夕方、大勢の子どもたちがふれあいの館に着いてもっと驚きました。

元気な小学生達が大きなバスから次々と降りてきたのです。親とスタッフとで 100 人にもなりました。スタッフのみんながとてもまめまめしく世話するのを見て又びっくり。食事やおやつを作り、スキー場に行ったり、ゲームをやったり、お風呂に入れたり…。

暮れの忙しい時で何もしてあげられなかった事を悔やんでいますが、温泉を汲んで入って貰えた事だけでも良かったと思っています。

閉会式では最後までゆっくりとみんなのお話を聞きました。特に子どもたちがスタッフの人達の労をねぎらい、声を上げて泣き伏せる姿を見て、私もずっと涙を流しつづけました。この子達の何時まで続くか分からない苦難の道を考えると、どうしようもない、やるせない気持ちが込み上げて来ました。

なぜこんな事になってしまったのか。なぜこんな事になってしまうまで手を打たなかったのか…。

私達の地球は長いながい時間をかけて今になったのです。地球の営みは大変デリケートな事柄がたくさん絡み合ってなされています。生きものも又そのデリケートな営みの中の一つなのです。だからデリケートな地球の営みに逆らうことなく、寄り添って、従って生きるべきなのです。

どんな寒い時でも雲が切れて太陽の光が差すととても暖かくなります。どんなに寒い冬でも寒さに耐えて頑張っていると春が来ます。雪もとけてきれいな水になって流れます。どんなに無理をしても自然には勝てません。自然のなりゆくままに、自然にまかせて生きていく他には手は無いのです。

この子どもたちも又、ずっと続いてきた自然の営みの中で生きていけるようにだけはしてやりたいと思わずにはいられません。

社会人サポーターから

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ
大島巧

先日、私にお手紙をくれた女の子がいました。
「すべてがへんになっちゃったみたい。」

つたない文字は、もう、精一杯でした。これこそが、本当の意味で憂うべく“未曽有”であり、先は長い道のりであることを知らされました。
がむしゃらになって一流のモノを手に入れてきたニッポン。とても大切な何かを引き替えに、でも、それが豊かさの証であり、幸せの形であると信じた…。その振り返りの機会が、今まさに来ています。
私は、子どもたちの咲顔のため一途な学生たちの姿に魅せられて、この“家族”の輪に入りました。次期親予備軍たちは、きっとまっすぐに、将来の彼ら自身の子どもたちも育てていってくれることでしょう。そして、その未来につながる愛とチカラこそが、ニッポンを変えていく“原動力”になると信じています。

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ
富田正美

東日本大震災から一年が経ちましたが、あの大震災を受けて日本は変わったでしょうか？何だか、想定外という言葉だけで片付けられてしまって、周りを見回してみてもあまり変わっていないような気がします。
しかし、一部の若者たちは、確実にこのままではいけないと感じ始めています。
『愛チカラ』の学生たちは、全ての人に平等に与えられた 1 日 24 時間という時間の中で、できる限り真実を実感するために自分にリミッターをつけないで、遊びゴコロをもって、ワクワク、キラキラと活動をしています。
彼らは今、歴史のページにまだ書かれていないことを書き込むために一生懸命に模索をしている最中です。
彼らは「勝ち組」にはなれないかもしれません。でも、彼らはきっと「価値組」であるとボクは確信しています。
だから、私はそんな彼らが中核となった世の中を見るために、もう少しだけ長生きをしたいと思っています。

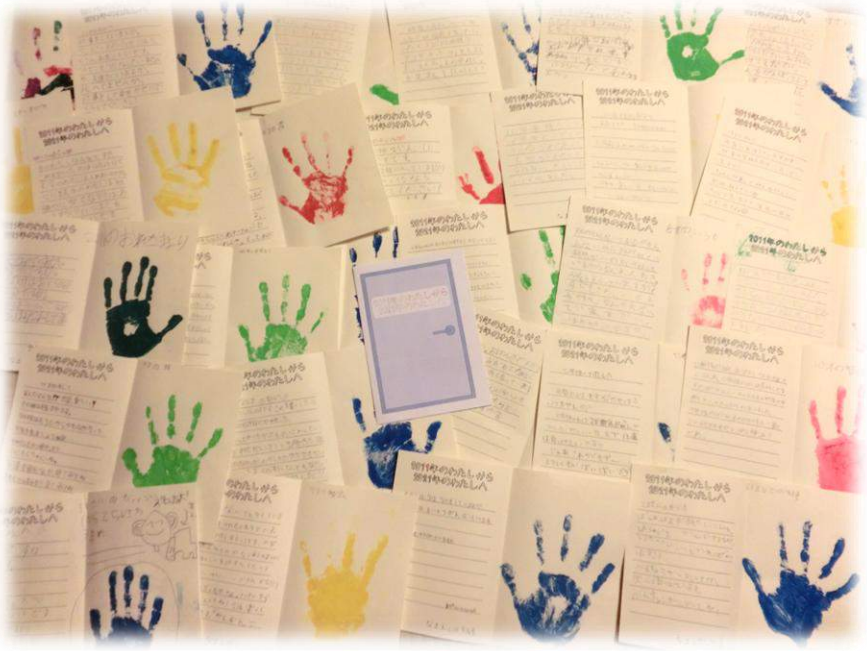
コンパン
PLEAS!

あなたの“生きる”は何ですか？

「……10年後生きていますか？」

この言葉は、子どもたちがウィンターキャンプ中に“10年後の自分”に宛てて書いた手紙の一説です。

2011 年 3 月 11 日から一年が経ち、私たちは今日も生きています。
震災以降“生きる”とは何かを多くの方が見つめ直した事と思います。
それは、大人や子どもといった、年齢による枠とは関係なく、それぞれの目線で“生きる”を見つめ、思い悩んだ日々であった事でしょう。 この報告書の完成間近に、ふと『このまま入稿しても良いものか…』と思い悩みました。
支援をしている側の私たちは、どれだけ被災者のみなさんと向き合ったとしても“当事者”としてのメッセージを残す事はできないのです。
このキャンプに参加した子どもたちが、10 年後の自分へメッセージを書いた時、夢を描けず頭を抱えながらやっとの思いで「生きていますか？」と記したこのメッセージは、一生消える事のない過去となるのです。
この心の傷は消えず、誰も触れる事はできません。自身で向き合わない限りは、この傷は癒される事はないのです。
一年、また一年と月日を重ねる度に、子どもたちがたくましく育ち、福島で生まれた自分自身を誇りに思う日が来る事を願っています。
子どもたちが、この一年を振り返り書き綴った思いは、自身の中にある真っ白なキャンパスに再び描きはじめた、未来に向けた感動の一筆です。



今年一年をふり返って

今年一年をふり返って

三月十一日に、ぼくは図書室でパソコンをしているときに地震がおきました。少しがさりゆれが最初にきて「地震かな？」と先生がいった瞬間強いゆれが来たので机にかくれました。それから数分ぐらいゆれが続きました。いつもとはちがうゆれに学校がくずれるんじゃないかと思うほど怖くなりました。ゆれがおさまったあと、先生と健ちゃんとぼくたちは歩いて帰りました。

次の日、東京電力福島第一原子力発電所の一号機が水素爆発をおこし、大量の放射能がもれ、ぼくたちの住む郡山市にも降り注ぎました。

この日から、放射能を気にして、外にあまり出なくなりました。

四月六日に始業式がありました。久しぶりにみんなに会えてうれしかったです。

学校が始まってからは、親の車で登下校していましたが、五月からはイクのハスが出たので、それに乗って学校に行きました。

八月が去り、九月一日から八月末日まで絵知にサマーキャンプにいきました。みんなで遊園地に行ったり、カードゲームをしたりして、楽しかったです。

九月と十月は、学校の行事で会津や山形に行きました。

冬休みには岐阜へウインターキャンプに行きました。

姫路に行ったりしたけどみんなと泊まったりしたのは、楽しかったです。

できれば、またキャンプに行きたいです。

ウインターキャンプが終わると、そのまま鳥取の親戚の家に行って正月をすごしました。

今まで、こんなにいろんなところに行ったり、いろんな人に会えたのは始めてで、よかったです。いいうんな思い出が出来ました。

でも、地震のせいで、引っこさなくてはいけなくなりました。

みなさんに会えなくなるので、とても悲しいです。

ぼくは、それが一番いやです。

放射能がなくなるのでは方ないですがいつか帰ってきたいと思います。

そのときには放射能が無くなっていてほしいです。

愛知に行っても、この年のことを忘れず成長してもどってきたいです。

今日で3月１１日

今日で三月十一日に起きた「東日本大震災」から5年です。

あの日はちょうど恒例小学校では卒業式の練習をしていました。そして、地面が急ぐらぐらゆれたのでわたしは、「地震だ。自分になりました。強いゆれがなかなか収まらなくて泣いている人も少なくありませんでした。

そして、大きな声でおきてから、全員から

ボランティアの方々が来てくれるようになりました。ボランティアのみなさんは、一ぱいの方々だけではなくてボランティアのスタッフの方々や英能人の方々も支援をしてくださるようになりました。皆さんのおかげさまにも感謝をしています。ありがとうございました。

これからも、感謝をする気持ちを忘れずにかきたいと思います。ありがとうございました。

原発の事があって

平成二十三年三月十一日午後二時四十六分
「ガタガタ」M9の大地しんがおそ
った。ぼくは学校の四十室のテーブルの下に
かくれて何度もくる大きい地しんはとても
こわかった
その時からぼくの生活が大変化した。それ
は原発がばく発したからだ。生活が大変化し
たのは学校が事になり学校では校庭で遊べ
なくなり、天気がよくても外で思いきり遊べ
ず、体育館でドッチボールなどして過ごした
。外で思いきり遊べないのは正直ものすごく
つらかった。
暑い日もマスクをつけるのは熱中症を防
ぐためにもしかたないようにすごしたぼくは
しょう来ケンにもりたとないできる事なら一
年前いや二年前にもどってそれでしんがとる事
をみんなに伝えて、こんな事にならないよう
に対さくをとって、そしてまた、みんなもはなれば
なれにならないくらいものら・・・。あなたも
はなれ ばはれなとてもかなしいたのこと思う。

一年をふりかえってみると、かまんやつら
い事たらけた。たりで、この原発の事がな
ったからふ会えた人達もいる。ほくが夏休にメ
トレスをかかえている者。ロボに参子カテの
みんなと出会った。サマーキャンプもクイン
ターキャンプとても楽しかった。マスクも
もしなくていいし外で思いきりドッチボール
をできた。毎日、楽しい企画がありがとう人
で毎日ハッピーだった。参観のことを思い出
すひまもないくらいに毎日本当に心から笑
えてとても楽しかった
今は雪がふってもう雪遊びもできないくらいメト
レスがたまるけど参子カテのみんなと過ごした
時間を思い出すと元気がでてがんばろうと
思いました。これからもよろしくお願いしま
す。

一年かんのおもい

一年かんのおもい

ぼくは、ようちえんがおわって車にのっているときにじしんがきて車がすごくゆれました。そして、おせあとりんでうちにもどりました。ちゃのまのかくがおちていてガラスがわれていました。こわかったです。じしんは、よるまでつづきました。よるねむけがこわくてねれませんでした。

そしてよるおそくにねむりました。

四月になって、ぼくは、一年生になりました。学校ではおそとで一どもあそべませんでした。そとであそべないかわりにたいくせんでともだちとおにごっこをしてあそんでました。ほんとは、そとであそびたいけどかぜをひくからかわいそうかなとおもってそとにはいませんでしたが、ぼくは、そとでプランコたのしかったです。

せっかくなって、ぼくはあいちにいきました。

あいちでかざーや川であそびました。たのしかったです。

３・１１からの１年

３・１１から１年

２年

３・１１

その言葉を聞いただけでもあの日のことがよみがえってくる。

３・１１の地震がなる２日前から地震がんんていた。３・１１のこの日　まさかこんなにも大きな地震がくるとも思っていなかった。

３月１１日には、バレーのみんなでいろいろ会に行く予定だった。だが、それも、３・１１の東日本大震災のあいさつで、楽しみにしていたいろいろ会は、えんえん、延期することもあまるなかったから、上小国のふれあいセンターで、話しをいっぱい　自分達で考えた、遊びのみで楽しだ。本当なら、みんなで泊まって楽しくすごしたかったのに。

震災があってから、学校もバレーも休み。学校から（道路にシラフほど　電話がくるが、また電話がきてからどん学校に行く日がえんき。けっきょくそのまま春休みになった。ち

ろう人バレーも、とうぶんのあいだ休み。

気晴らで外でも遊べず　たいくつな毎日。いつも家の中　テレビを見ているだけだった。

でも、この日になると学校も始まった。バレーもはじまった。夏になり、７月上旬、夏休みに海に行くお祭りがあった。私は学校のくことに決め　お母さんに大きく手をふって、

私がサマーキャンプでの一番のぜい沢はプールと流しそうめんをやったこと。なぜかというと、外でできるアトルは、久しぶりで流しそうめんも、外でなんはあきあいけど、学校でできたからだ。多い波乗に乗った。波乗でゆ一番の思い出は、スキーとスケート。

スキーでは、インストラクターの人にほめてもらえたし、スケートでも　上手と言われた。

福島では、できないことを出きたこと、愛知や岐阜で感じた、自然の大切さ。

震災があって、人と人とのつながりや、話すきずなも改めて知った。

もう今日で１年が経つけど、とがんばれば、も、といいところになるから。

だからこそ、これからまたみんなが、がんばらなくてはいけないと、がんばれば、ふの福島ではなく、新しい福島を作りあげるから。

これから先も、とがんばって行きましょう。そうすれば、きっと感謝が返るから。

一年をふりかえって

一年をふりかえって

ぼくは、一年をふりかえってみると、いろいろなことがありました。

入校中下しんど6の地しんがあり、ぼくはいらいらしなくてすみましたし、家にかえると、すたなきたおれていたりガラスがわれていて入ってはこまったことがなくてびっくりしました。

水道でなくて何日か八ゲツ水に入っていました。

そのあと、ダンダンぼくはつよくしてほしいのようというのが起きなくなにがなんだかわからなくなりました。お父さんお母さんはたいへんでした。

ぼくは、みていることしかできませんでした。

その後、水ちゃあそびなくなりました。だんだんはそしりのようというのがあがってきました。

ぼくの毎日の生活もかわってきました。

水道のめなくなるし、外であそべなくなるし、テレビもしなくちゃだし、毎日ねりようをつけなくちゃだし、ぼうしもかぶらなきゃだし、夏なのに長そでを着ておかなだし、学校でも水で大きなたいいくができなくなりました。学にゅうもの多いし、みんなと同じきゅう食を食べられなくなりました。

ぼくは、一番いやだったことは、ちょっとのがいやでした。夜ぼくはなきました。ばあちゃんが、おこのそばで、やだのやだと言なくなるかりなきました。大きいお気に家ぞくみんなですわなくなるのもなきました。

ぼくは、この一年でかぞくの大切さをしりました。

家ぞくぎはりたなるのがいやです。

この手がみはがっこうでかいたものです。

家ぞくのみんなへ

ぼくは、家ぞくが大すきです。

家ぞくはぼくにやさしくしてくれます。

たまにおこりやすいこともあるけれどいろんな家ぞくがいるようです。

みんなでおもつたいろいろなことがあります。

そんな家ぞくとが、といっしょにいたいです。

さいごに、みなさんのみなさんをくるしめているほうしゃのうきゆるしません。やっつけたいです。

東日本大震災から一年

東日本大震災から二年。ぼくは、大震災でつらかったこと、うれしかったこと、悲しかったこと、いろいろあった。

うれしかったこと、それは、学子からのみんなと会えたことだ。なぜなら、大震災で遠ちこんでいたぼくをはげましてくれたこと、いろいろ教えてくれたこと、そして、なにより友達になってくれたことそれがとてもうれしかった。

つらかったこと、それは、小田小からも月田小への転校だ。なぜ転校することになったのか、それは、放しゃのうという見えない物質のせいだ。ぼくの住んでいた場所は、放しゃせん量が高く約定避難かんしょう地点に選ばれ、転校することになった。ぼくは、その時「小田に残って小田小学校で卒業したい」と言った。なぜなら、小田小でみんなとかかよくなり、深いきずなを作ったからだった。

けれども、お母さんとお父さんは、「十年二十年たったら、体に影響が出るんだ上」と言われて、転校することにした。しかし、転校する時とてもつらかった。

そして、もう一つそれは、夏でも長そで、長ずぼんで登校していたことだ。ぼくは、とてもつらかった。なぜかというと、いつもだったらまそで半ずぼんで登校していたからだ。すべて、放しゃのうのせいだとぼくは、思った。

悲しかったこと、それは、テレビのせで、津波がおこり、家が流され、人や動物がかんぜんに死んでいく様子がとても悲しかった。人間は、なにか悪い事をしていたのだろうか。だから罰がくだされたのだろうか。そんな思いがぼくにはあった。

最後に、後から生まれてくる人達に、東日本大震災というおそろしい出来事がある。ということを伝えたいと思っている。そのために、自分の夢である画家を目ざしがんばりたいと思う。そして絵をかいて、その人たちに伝えたいと思う。ぼくは、東日本大震災をたえずに、まえへと一歩、一歩、歩いていきたいと思う。

20
141
10
6
133
KURAIYAMA

We are family

愛子カラスタッフ

青井　里美（さっとみん）
石原　杏莉（あんり）
石原　なる美（みんみん）
岩井　沙織（さおりん）
上里　哲太郎（てっつん）
大井　優子（たま）
大島　巧（おじサンタ）
小原　有輝也（ゆっきーや）
片山　日香里（ぴっかり）
川瀬　美穂（らしこ）
北原　直樹（おむすび）
鬼頭　将大（きとぅ）
河内　智仁（おにぃやん）
小金沢　奈央（なお）
小島　琴雅（こっちゃん）
小林　明日香（くろ）
小森　舞（ハーフィー）
志治　友規（なんなん）
篠田　唯香（だーゆか）
柴田　結実子（はな）
椙岡　拓己（ディッシュ）
鈴木　理恵（スー様）
鈴木　流風（るってぃ）
高嶋　辰宜（たっつん）
高松　有希（ゆきさん）
東松　広岳（とうまつさん）
冨田　正美（トミーさん）
中嶋　良輔（ちゃんきよ）
野田　実里（のだみ）
橋本　直明（なおくん）
服部　誠司（にんにん）
林　竜人（りゅうと）
宮崎　彰顕（ざっきー）
御堂　大貴（みどぅ）
桃木　梢（こずこず）
矢野　江里（エリーゼ）
山本　祐里（ゆりぃ）
横倉　亜美（あみぃ）

50 音順

Thank you

We are family

ボランティアスタッフ

浅野　愛加	島立　翔	久世　貴絵	桃北　英雄
泉　輝旭	露口　朱音	佐藤　和宏	山口　智美
伊藤　水脈	土井　美咲	杉浦　真衣	山地　健弘
井上　沙樹	中村　祐人	杉本　香保里	山村　章太
奥村　奈穂美	野村　小百合	副島　萌生	吉村　康範
加藤　沙耶	樋口　敬祐	高倉　彩奈重	渡辺　沙央子
川岡　大才	松田　紗季	竹内　絵美	渡辺　光恵
神田　和也	御堂　奈津貴	竹内　啓祐	渡辺　優
木村　淳史	宮島　美香	坪井　保成美	

50 音順

Thank you

We are family

協力して下さった方々

内木健さん
中島紀于さん
安藤直樹さん
樋口一則さん
樋口菊代さん
大井孝市さん
竹内正美さん
中村浩さん
伴野優蔵さん
木村弘治さん
浦西由希江さん
善田奈緒さん
小林恵さん
小金沢行夫さん
宮本弘一さん
熊崎勝彦さん
大島成則さん
浅田昭茂さん
浅田みほさん
丹羽照夫さん
奥土居光さん
梅田敏子さん
吉川登与子さん
新田根康さん
近藤貞恵さん
杉浦優子さん
バルーンパフォーマー哲さん
揖斐信輔さん
杉浦宣之さん
飯田恵司さん
スティール真知子さん
谷岡曜子さん
加子母のボランティアのお母さん方

Thank you

共催

・小国からの咲顔

協力機関

・愛知県防災危機管理課
・福島県伊達市
・福島県伊達市教育委員会
・岐阜県中津川市
・岐阜県中津川市加子母総合事務所
・加子母研修交流施設「ふれあいのやかた　かしも」
・岐阜県クリスタルパーク恵那スケート場
・恵那市スポーツ少年団事務局
・半田市立亀崎中学校
・医療法人　広川レディスクリニック

協力企業

・株式会社中島工務店
・株式会社大木家
・株式会社エフエムアライアンス
・株式会社グランディール
・株式会社矢作新報社
・中央市場総合食品センター
・有限会社マルトー食品
・細江観光
・山下寝具株式会社
・株式会社 EHS
・ヤマキ製茶
・有限会社ISO
・名鉄観光サービス株式会社
・Anbusa International, Inc
・スターシャル教育研究所
・吉村商店
・紙文総合販売株式会社
・たまご村
・株式会社ガロ・コーポレーション
・株式会社オールスター観光

協力団体

・道の駅加子母
・付知峡倉屋温泉　おんぽいの湯
・学校法人　至学館大学・短期大学部
・国際ソロプチミスト　愛知ガーデニア
・モンデウス飛騨位山スノーパーク
・モンデウス位山スキー学校
・谷岡郁子事務所
・武並町まちづくり町民議会食農部会
・名城大学ボランティア協議会
・和太鼓海燕
・石ヶ瀬会館
・織と染　むらせ
・東美濃農業協同組合　加子母支店
・中京大学　国際英語学部　金ゼミー同
・セブンラブ（カラオケ店）
・イタリア料理　IL　FIORE（イル　フィオーレ）
・チャリティサンタ

『愛チカラ』とは

日本の未来を担う“学生”が主役の活動です―

当団体愛チカラは、3月11日に起きた東日本大震災をきっかけとし、愛知県内の学生と社会人が集まり、**復興支援**を自発的に行う団体として設立致しました。主に、**学生**が主役となって活動し、それを後方から社会人がサポートするといったスタイルが当団体の特色であり、立場や世代を越えたメンバーが支え合い、自己の成長につなげ、**一日も早い復興**を目指し日々活動を行っています。

お問い合わせ

東日本大震災復興支援団体　愛チカラ

代表　石原杏莉　　副代表　柴田結実子

〒460-0017　名古屋市中区松原 1-3-5　605 号
ＴＥＬ：052-222-4311
E-mail ：aichikara2011@gmail.com
ＵＲＬ：http://www.ai-chikara.com/
（愛知県防災ボランティアグループ 23 防危第 98-1 号）

災害ボランティア・NPO活動サポート募金

担当　青井里美
小林明日香
矢野江里
学生コーチ　鈴木理恵